日本一きれいな大学にしよう

職場ルポ

― 富山大学（五福キャンパス）―

（文）清原れい子　（写真）小山博孝

富山大学五福キャンパス

取材先データ

富山大学（五福キャンパス）
〒930-8555 富山市五福3190
TEL 076-445-6524　FAX 076-445-6024

keyword: 知的障害、発達障害、国公立大学、障害理解、就学・就労支援

POINT

① 大学で知的障害者を雇用
② 発達障害学生の修学・就労支援
③ 障害者への学生の認識を高める

総務部人事企画課杉本祐文係長

キャンパスクリーンチームを設立

旧富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の3大学の再編統合により2005（平成17）年に新たに発足した富山大学は、人文・人間発達科学・経済・理・工・医・薬・芸術文化の8学部と和漢医薬学総合研究所、附属病院の計10部局を擁する総合大学で、約1万人の学生が学んでいる。全国の大学の中でいち早くアクセシビリティ・コミュニケーション支援室を立ち上げて、発達障害のある学生の修学・就労支援に取り組み、また「日本一きれいな大学にしよう」と、知的障害者を環境クリーンスタッフとしたキャンパスクリーンチームが構内の清掃・環境美化を行っている。教職員は非常勤を含め、約3000人。障害者雇用率は2・3％になる。

2009年、富山大学では障害者雇用推進室を設置し、「キャンパスクリーンチーム」を設立した。総務部人事企画課係長の杉本祐文（ひろふみ）さんは、立ち上げからかかわった。

「知的障害者が清掃チームで働いている東京大学を視察して、キャンパスクリーンチームをつくり、毎年5人ずつ雇用していく4年計画を立てました。当時は雇用率が低かったのですが、学内の身体障害者手帳をお持ちの方に申し出ていただくよう働きかけた結果、1年で法定雇用率を達成できました」

キャンパスクリーンチームは、知的障害者のスタッフ4人と富山大学を定年退職した職員を再雇用した支援員2人でスタートした。

「最初はできるかどうか心配だという支援員の声もありましたが、いまはキャンパスクリーンチームに、支援員として再雇用職員で働きたいと希望される定年職員もいらっしゃいます。教育機関として、知的障害者の就業機会の拡大を通じて社会貢献をしたいと思います。特に仕事上のノルマはなく、安全で健康に働いていただければと思っています」

勤務時間は9時から16時。スタッフは1年契約・最長3年雇用の非常勤職員で、時給は800円。以前は特別支援学校卒業予定者の応募が多かったが、近年は企業就職への準備期間として就労継続支援A型事業所へ進む傾向が増えているため、応募者が少なくなっているとか。

「今年は、昨年同様スタッフ16人体制を予定していましたが、現在、スタッフ13人、支援員5人の体制で随時スタッフを募集中

富山大学五福キャンパス内で活躍する「キャンパスクリーンチーム」

キャンパスクリーンチームの
ユニフォーム

です。予定スタッフ数が確保できない可能性もあるため、昨年度、最長3年の雇用期間について、大学が特に必要と判断した場合は雇用延長もできる取扱いを設けました。本人の希望も聞いた上で、4年目で働いているスタッフもいます」

3年後の就職活動では、ハローワークを通じて知的障害者を清掃業務などで募集している企業を探している。

「民間企業に就職する前の職場訓練、社会人としての心構えを育てて民間企業に送り出す教育機関としての使命もあるのかと考えています。支援員は人生経験豊富ですので、精神面の教育もしています。3年間勤務した後、県内の民間企業で働いている人が何人もいますが、富山大学で働いた人をほしいという声をいただいていますし、保護者の方からも高い評価をいただいています」

「きれいになった」と高評価

キャンパスクリーンチームのユニフォームは、夏はさわやかなミントグリーンのポロシャツ。胸に「富山大学」の文字が入っている。毎日の業務は、廊下や階段の掃除、手すり拭き、床のシミ取り、ゴミ回収・分別、落ち葉の清掃、植木の剪定、除草、除雪など多岐にわたる。

業務で気をつけていることを聞くと、「ゴミを残さない、体調管理と安全、廊下や階段掃除で音が響かないようにする」など、さまざまな声があがる。得意な仕事は、外掃除、階段掃除、竹ぼうきで落ち葉をサッとはく……など。

大変なこともあるという。ゴミが分別されていないとき、廊下のシミがなかなか取れないとき、たくさんの落ち葉、空き缶やペットボトルのにおい。通勤の市内電車（混雑する）など。

うれしいことは、学生や教職員から「おはよう」、「いつも掃除してくれてありがとう」といわれるとき。休みの日は、買い物、サイクリング、読書、ゲームなど、それぞれに楽しむ。

働き始めて3年目のリーダー格の2人は取材の日、就職面接に出かけた。理学部を担当する杉森建彦（すぎもりたつひこ）さん（30歳）は、休日は陸上中距離の練習をしている。

「後輩に教えるとき、言葉遣いに気をつけています。仕事は楽しい。清掃の仕事は自信がありますが、ほかの仕事もしてみたいです。陸上400メートルが得意。目指すのは、スペシャルオリンピックスの全国大会優勝です」

人間発達科学部担当の喜中信次（きなかしんじ）さん（21歳）は、学校の先生や親に勧められて就職した。

「仕事は楽しいです。仲間と触れ合えることや、水内先生（後述）に『今日も頑張りましょう』と応援されることもうれしいです。大学の先生、学生さんは心が優しい。暑いときは自己管理で水分補給をしていま

理学部の清掃を担当する杉森建彦さん、
陸上選手としても頑張っている

今後も清掃業務に携わっていきたいと話す
喜中信次さん

キャンパスクリーンチームの支援員のみなさん

終礼

す。休みの日は家でのんびりしたり、パソコンでネットを見たりゲームをしたり、たまに小説も読んでいます。これからも清掃の仕事を探したいです」

今年度の支援員のリーダー、川原卯吉さんは特に安全に気をつけている。

「剪定ばさみを使いますし、休み時間にメインストリートを自転車でかなりのスピードで通る学生もいるので、ぶつからないようにとか、朝のミーティングでは、安全と健康について注意しています」

杉本さんによると、キャンパスクリーンチームは大学内で広く知られているという。

「午前中はメインストリートを掃除していますので、学生、教職員が、『おはようございます』、『ご苦労さま』、『きれいにしてくれてありがとう』など声をかけています。特に女子学生に声をかけられると、うれしくて一生懸命頑張ろうという気持ちになるそうです。以前は1つの学部を1人の業者さんが清掃していたのを、4人ずつのチームで担当するようにしました。作業能力が上がるので、『きれいになった』と高評価をいただいています」

仕事だけではなく、楽しみも大切

富山大学人間発達科学部には発達教育学科発達福祉コースがある。准教授の水内豊和さんは、障害者雇用推進室とアクセシビリティ・コミュニケーション支援室にも籍を置き、キャンパスクリーンチームのソフト面の支援にあたる。

チームの支援にあたる水内豊和准教授

「私が障害者雇用推進室にいる意味は、知的障害を含めた障害者のことをよく理解し、臨床発達心理士として心理関係のアプローチを行い、彼らを支えることができることだと思っています。悩みやストレスがあるときに対応したり、また福利厚生面を充実させて、スタッフが働きがい、誇りを持って働ける環境づくりを考えています」

バーベキューなどの懇親会やビアガーデンパーティを企画したり、富山大学で働くことの意味を考える研修会などを行っている。

「自分たちの仕事が、学生、教職員にどのように映るのかを考えてみようというテーマです。富山大学という看板で信用を得たり、逆に不祥事を起こしたら信用が失墜することもわかってほしいです。今年は個人面談を行い、一人ひとりの悩みや相談にも乗っています。また、学生たちには障害者雇用の実情や知的障害者の特性を知ってほしいので、学部の特別支援教育に関する授業の一環として学生たちがスタッフに仕事を教えてもらいながら体験的に学ぶ機会も設けています。さらに県内の企業さんや地域の方たちには頑張っていることを知ってほしいので、最近キャンパスクリーンチームの取り組みを紹介するFacebookの公開ページを開設しま

した」

大学の教員として、国立大学全般や特に富山大学における障害者雇用に関する研究調査も行っている。

「国立大学は約90校ありますが、知的障害者が環境美化を行っている大学のなかでも、ここほどアットホームで仲間関係がよくて、彼らが頑張っていると伝わってくる大学はないと、自信をもっていえると思っています。『富山大学にいたスタッフはどこに行っても通用する』という就業訓練の場にもなってほしいと思います」

キャンパスクリーンチームのスタッフは、1期生が残した「日本一きれいな大学にしよう」を合言葉に、日々の業務に励んでいる。

「仕事ができるからやっているというだけでは、続かないと思います。仕事が楽しい、自分は任されている、うれしいという気持ちを持ってほしい。もう1つは、勤務後や土日の余暇のアドバイスもしています。仕事全般に関する支援をするのが私の役割だと思っています」

キャンパスクリーンチームのスタッフたちは富山大学での経験を糧に、民間企業に大きく巣立ってほしい。

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室

効果が上がっている修学支援

富山大学には、学生支援センターの中に「アクセシビリティ・コミュニケーション支援室」があり、トータルコミュニケーション支援部門（2007年設立）と身体障害学生支援部門（2012年設立）がある。

2007年、発達障害、発達障害の傾向を持っている学生たちへのサポートが必要ではないかとの考えから、文部科学省の「平成19年度新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に申請。その選定を受けて、「トータルコミュニケーション支援部門」を設立した。医師・臨床心理士でもある保健管理センター長で教授の齋藤清二さんは立ち上げにかかわった。

「発達障害と診断されている学生だけの支援では、学内で起こっている本人、教員、家族の困りごとに対応しきれません。発達障害があるといい切れない学生のほうが多いので、やれるところからやりましょうと、学生1～2人の支援からスタートしました」

保健管理センター准教授で、支援室長の西村優紀美さんも設立当初からかかわった。

「保健管理センターの学生相談で心理カウンセリングをしても、うまく修学していけない学生がいました。当時は、知的障害がない発達障害の人が大学にいるという認識がなかったのですが、社会的なコミュニケーションに課題があるのではという学生がいたのです。修学支援なら、本人の努力だけでうまくいかないときは教職員と連携することができます」

4年間の「学生支援GP」終了後、事業の実績が評価され、大学で予算化された。2014年度末で支援している学生は71人。発達障害が圧倒的に多く、56人。そのうち「発達障害」の診断を受けている学生は10人ほどで、未診断だがサポートが必要

学生支援にあたった齋藤教授たちがまとめた本

保健管理センター長の齋藤清二教授

支援室長の西村優紀美准教授（左）と
桶谷文哲特命講師

という学生が多い。西村さんは、教職員との連携が大切だという。

「指導が難しい、授業にまじめに出ているのにレポートの点数がとれないなど、修学上、困ったことがあればサポートしています。自分から来る人はほとんどいなくて、先生方や事務の方から、通常の教育や事務のなかでうまくいかない学生が紹介されてきます。こちらから指示しないとできない人たちではなく、一緒に考えれば、どうすればいいかがわかってきます。週1回の定期面談が基本で、『できてもできなくても、確認するためにここに来ましょう』と話します。関係が切れない努力が大切で、相談に来たケースはほとんどうまくいっています」

支援室の特命講師、桶谷文哲（おけたにふみのり）さんも実際の支援にあたっている。

「まじめに努力しているのだけれど、何かしら問題があってうまくいかないという学生をサポートしています。意外に簡単なところでくじけていることもあります。困りごとや生活面を含めて状況を把握し、きめ細やかにサポートをしていきますので、有効性ははっきりあると思います」

就職支援もていねいに

授業を受けられるようになった学生が次に直面したのは、就職だった。齋藤さんは、就職支援は白紙の状態から始まったと話す。

「2～3年経つと、修学支援は何とかやれそうで、一番の問題は就職だとわかりました。就職支援は大学がどこまでやるのか、どこまでできるのか、まったく白紙でした。就労、まして定着支援は経験がなくて、やっとものがいえるという状況にきましたね」

昨年度は12人の就職支援をして、4人が決まった。そのうちの3人は既卒者で、卒業後3年目に採用された人もいる。

桶谷さんは具体的な支援を行う。

「3年後期から就職活動が始まりますが、どう動いていいかわからない。就職の話を進めると、『自分にはできない』と拒絶反応が起こりうるので、まずは卒業を目指します。そして、卒業後もサポートしています」

支援学生のほとんどは一般就職していくため、本人に1カ月に1回大学にきてもらい、フォローアップ面談を続ける。

「大学では空き時間にリラックスできても、仕事では、いつ休憩をとればいいのかわからない人もいます。生活全体が整っていないと崩れていくので、休日のアドバイス、仕事との切り替えなど、就職後のフォローアップが大事です」

西村さんは、発達障害の学生の就職の困難さを感じている。

「身体に障害のある学生は、大卒だと一般学生と同じように就職しています。まだ、大卒の障害者枠での採用は、発達障害を想定していない場合が多いのではないかと思います。修学支援の蓄積が就職支援にも生きるという確信はありますが、一般採用で就職したいといってもコミュニケーションがうまくできないので、面接が難しいですね」

お2人に企業側への要望をきいた。

桶谷さんは、「発達障害という診断名にとらわれずに、得意なところと苦手なところを先入観なしに見ていただきたい。過剰な支援がなくても、適材適所で使っていただければ、しっかり働ける人材として見ていただけると思います」

西村さんは、「発達障害の人が働きやすい会社は、視覚情報やマニュアルがきちんとしていて、ほかの従業員も働きやすいと思います。すべての人に行き違いや失敗がないように環境を工夫すると、かなりうまく働けると思います。大学まできた人は、一見ボーっとしているように見えるときがありますが、高機能自閉症で頭の回転が速すぎて周囲の人とうまくいかないということもあります。得意なところに期待してほしい。休まないし、やるべきことはきちんとやりますから、仕事がはまれば限りなく役に立ち、会社にとてもメリットになると思います」

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室では、発達障害学生への修学・就労支援の貴重な経験を蓄積している。今後、就労支援機関との連携を進め、その知識を広げてほしい。